

崔承喜(チェ シンヒ)生誕100年

足立 龍枝

大野節子さんと金達寿さん

筑豊の麻生吉隈炭坑で犠牲になった朝鮮人・日本人を供養する「徳香追墓碑」を守り、「強制連行を考える会」の代表をされている85歳の大野節子さんとは、30年近い付き合いが続いている。



去年の秋「大野さんから預かってきました」と、考える会のメンバーから韓国で受け取ったのは、大野さんが描かれた絵はがきと追慕碑供養の「唐子おどり」の手ぬぐいだった。絵はがきは、例年ボタ山をバックに踊っている日本人あるいは朝鮮人の娘や水がめを頭にのせている村娘、夜桜の下で踊っている娘など。明るい色が使われていて、娘の目はパッチリ、筆による輪郭線が生き生きとしている。

去年の絵はがきには、羽の付いた帽子をかぶり、鈴と扇を持って踊っている巫女が描かれていて、「併合百年 舞姫 崔承喜」と添えられていた。

大げさなようだが、はがきを持つ手がふるえた。

35年ぐらい前になるだろうか、神戸学生青年センターの朝鮮史セミナーで、在日一世の作家金達寿(キム ダルス)さんの話を聞く機会があった。私の中での韓流の始まりだったかもしれない。

何回か聞いていると、そろそろ「東医宝鑑」(漢方の医学書で中国よりも先に出版された)が出てくるころかな、「金属活字印刷機」(ドイツのグーテンベルグより古い)のチャラン(自慢話)かなと想像し、秀吉の倭乱の話になると「蔚山倭城籠城」と決まってくる。そして、鼻の周りがピンクになり、ニコニコと笑みがこぼれると、それは「崔承喜」の話の前触れだ。声が上ずっていたように思う。

崔承喜は日本と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)に振り回された波乱万丈の人生であったが、セミナーでの金達寿さんの話は、『我らの希望の星、崔承喜。同胞たちの心の支え、崔承喜』に徹していた。1977年著「自分史の中の崔承喜」の中では、

『何とか希望を見出したいと、ワラをもつかみたい心境の人々に応えたのは崔承喜一人でした。そしてまた、一人で十分でした。それだけのものを彼女は持っていたと思います』と書かれている。

生誕百年に合わせて、写真展が韓国光州市立美術館や東京の韓国文化院で行われ、その他講演会、映画会、舞踊公演など後半になってから増えてきた。

今年、西木正明氏が崔承喜を書いた『さすらいの舞姫』を出版してテレビでも取り上げられた。同じ著者の『冬のアゼリア』は、場面を想像しながら緊張して読み、本を手に舞台になった密陽(ミリヤン)までも出かけた。ところが、今年度の900ページの本は詳しくは書かれているが、私には何も伝わってこない。「崔承喜はこんなんじやないはずや」読んでいて悲しくなってしまった。金達寿さんの崔承喜を包み込むようなやさしい顔が浮かんでこない。

大野さんにこの本を紹介したが、何とかイメージを変えたいと調べていたら、10年前の金贊汀さんの著書『炎は闇の彼方へ』が目につき、さっそく取り寄せて大野さんにも送った。

著者金贊汀さんは二世74歳。一世とともに生きてきた人である。読みながら金達寿さんを思い浮かべ、崔承喜の美しい炎のような舞姫姿を想像した。抵抗しながら創作舞踊を守っていこうと必死だった崔承喜の姿が浮かんできた。

大野さんが、その本に出ていた白黒の写真を見て描かれた絵がこの「チャンゴの舞」だ。グリーンのチマ、水色のチョゴリ、力強い腕。グループ展に出品されたものだが、今年しか描けない絵だという気迫を感じる。「崔承喜が植民地政策の中で憤りを秘めてチャンゴを打つ力強さは、心を傾けないと描けません。私は女学生時代まで過ごした中国東北部瀋陽で崔承喜にあこがれ夢を描いていました。この絵は崔承喜にささげるつもりで描きました」と手紙が添えられていた。



きっかけになったのは「併合百年の昨年3月23日、毎日新聞『忘れ得ぬ人々』に出ていた名前と、白黒の写真を見て70年前の女学生時代を思い出

したのです」と。

崔承喜のプロマイドを持ち、永田絢次郎(金永吉)の歌を聞いていた懐かしい思い出のある人だ。

日本でも崔承喜の公演を見て、とりこになった有名人は多い。川端康成・徳富蘆峰・西条八十・菊池寛・宇野千代・村山知義・山田耕作・芥川也寸志など、言論・芸能・音楽・実業界の面々が後援会員となつた。朝鮮総督、斎藤實もファンだったようだ。



(光州市立美術館所蔵
河正雄コレクション)

川端康成は、いくつかの随筆にも書いている。「崔承喜嬢」の最後の方を引用すると、『～崔承喜ほど恵まれた体躯の舞姫は二人といない。たいていの男より大きい。従って彼女の踊は大きく強い劇的なもので、その底に郷土朝鮮の哀愁をひめている。(発表年月未詳)』また『～古きものを新しく、弱まつたものを強め、滅びたものを甦らせ、自らの創作としたところに生命がある』(1939年文芸)など。

崔承喜の通学路を歩いてみて

日本に来て間もないときに出あつた大正天皇葬儀。石井漠舞踊研究所から葬礼を見送るために中央線沿線に出向いた。一同黙祷をしているとき、崔承喜は後ろ向きになって突っ立っていた。あとから石井漠がたしなめると「私は天皇さんを挙げる気持ちにはなれません」と抵抗したが、石井のことばには耳を傾けた。(ある映像の中で石井夫人は崔承喜に、天皇さんだと思わないで、普通の人だと思えばいいのよと話したと)16歳とはいえ不敬罪に相当することを堂々とやってのけた。これは金贊汀氏が時刻をよく調べてみると、夜中の通過だったから不敬罪で咎められなかつたのだろうと書かれている。崔承喜の日本に対する民族意識はそこまで高まつていたのだろう。

崔承喜のこの激しい民族意識は、基本的には兄承一の影響が大きいと思うが、先月、古い地図(19

29年発行の鳥瞰図と、1941年Y小学校の同窓会製作地図)を見ながら崔承喜の家から女学校までを歩いてみた。

崔承喜が石井漠研究所に行く前まで、両親と住んでいたところは、景福宮のすぐ西側の体府洞で、今その家はサムゲッタン専門店で知られる「土俗村」になっている。外側からも内に入つても、ほぼ当時のまま残つているように見える。(10月外装工事中)

そして、飛び級で一年早く進学した淑明女学校は、当時の地図で見ると、現在の鐘路区庁の東側、石炭会館が建つところ。家から学校まで信号もなかつただろうから15分ぐらいの通学路だ。

光化門が移転され、宮殿の多くの殿閣が撤去され、総督府建設の真っ只中を通学の行き帰りに見ていたのである。宮殿の後ろの三角山も見えなくしてしまうような巨大な総督府が完成していく過程が全身に焼き付いている。そんな崔承喜の心のうちは誰にも分らなかつたのではないかと歩きながら感じた。そして、彼女をいとおしく思う。

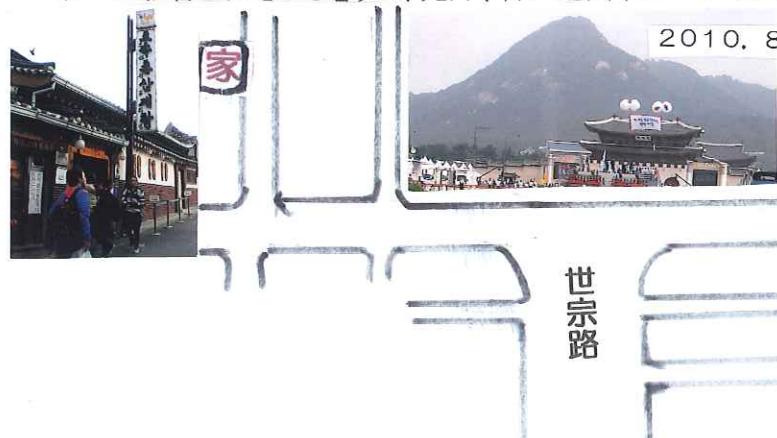
崔承喜が東京に行く前、当時のソウルでは「妓生(キーセン)になるために売られていった」というデマが飛び交つた。そして、淑明女学校の同窓会名簿から除名しようという動きまであった。

崔承喜は、朝鮮一の舞踊家になることでデマを吹き飛ばそうと思った。研究所では夜中にそっと起き、猛練習に没頭するということまでしていた。

宮城遙拝する崔承喜

崔承喜・安漠夫妻は、生涯において何度も何度も危機に瀕した。そんな時の結論は、創作朝鮮舞踊を継続していくには、日本政府に逆らうような言動は取らないこと、意に沿わないときにも切り抜けるために迎合的な態度を取ること……であった。

特にアメリカ公演で、在米朝鮮人から日本がアメリカに送り込んだ「日本の犬」と言われたあと、帰国したとき(1940年12月)には、崔承喜は東京着と同



2010. 8. 15 景福宮



鐘路区庁

時に宮城を遙拝し、明治神宮・靖国神社に参詣した。反日思想の持ち主でないことを印象づけるために夫、安漠(アン マク)と共に考えたことである。そこまでして創作朝鮮舞踊を守ろうとした悔しさが伝わってくる。「炎は闇の彼方へ」より)

崔承喜には1932年に、娘安聖姫(アン ソンヒ)が生まれた。

1998年にドキュメンタリー映画「伝説の舞姫 崔承喜」ができ、東京のセシオン杉並で公開された。

映画の内容は印象に残らなかったが、映画に協力した人の中に安聖姫の同級生小林亜星氏がいた。

彼はステージから思い出話として、安聖姫の家に行つたとき、母親、崔承喜からやさしく歓迎された思い出を話した。きれいなお母さん、崔承喜に声をかけられた小林少年を想像してみた。会場には大宮小学校での同級生が大勢集まっていたのだと思う。



日本での最後の舞台は1944年1月、帝国劇場で開かれた芸術舞踊発表会だった。観客を見て、崔承喜は朝鮮民族の底力を目の当たりにしたと話しているが、「チョッチー」「チョッタア」の掛け声の渦、踊りだす一世の肩の動きなど目に浮かぶ。崔夫妻と非常に親しく付き合っていた当時雑誌記者の高嶋雄三郎は、在日一世の人たちが崔承喜の舞台を鑑賞している姿を見て書いている。「……圧制に打ちひしがれている民族の怒りは、舞台と客席で相呼応し、彼らの日本での凡ゆる不満は、崔夫人の舞踊の天上無限の光栄によって霧消するものの如くであった……」1958年版「崔承喜」より

すごいと思ったのは、発表会にあわせて、東郷青児、梅原龍三郎・有島生馬・安井曾太郎・小磯良平他の画家や彫刻家の崔承喜の舞踊を絵に残したいという希望に沿って作品を制作したことである。日本での最後を飾るにふさわしい催しだったと思う。

解放後の崔承喜

解放後は北朝鮮で日本にいた時と同じように苦しむなければならなかつた。最初はよかつた。大同江

沿いに研究所を与えられた。私は25年前に330人の団体で北朝鮮旅行をしたときに研究所のあったところでピョンヤン冷麺を食べた。有名な「玉流館」である。研究所はわずかな期間だが、崔承喜が北朝鮮で味わった最高の日々だったのではないか。

崔承喜は舞踊生活30周年(1955年)の最盛期をピョンヤンで迎え、日本と同じように画家に絵を依頼した。ところが、これが後に個人英雄主義の表れだと非難される原因になり、50年代後半から少しづつ悲劇的な立場に追い込まれていく。

その後、長い間彼女の消息は途絶えていたが、1994年に発刊された金日成の回顧録に「1930年代、朝鮮民族舞踊の現代化と現代朝鮮舞踊の発展に寄与して国内外に熱烈な歓迎を受けた」と明確に表記されていたことから、2003年、政治的にも名誉回復することができた。

ピョンヤンの愛国烈士陵には「崔承喜女史 舞踊家同盟中央委員会委員長 人民俳優 1911年11月24日生 1969年8月8日死去」写真入り、縦長の墓碑に刻まれている。

現在は、韓国でも崔承喜の残した「児童舞踊基本」などが次々と出版され、大学で崔承喜の舞踊を取り入れている映像を見たことがある。また、児童書「新時代の大人物」シリーズの内外43人中にも入っている。



イデオロギーを超えた舞踊を常に求め、“舞う、舞い上がり！ひとつになるまで”をテーマにして30数年、大阪の朝鮮舞踊研究所の姜輝鮮(カン ヒソン)先生と久しぶりに会つた。(30年前、チャンゴを足掛け3年教えていただいたことがある)師、崔承喜を2時間余り熱っぽく語られた。紙面の都合で書ききれないが、ますます崔承喜にはまっていく自分を想像している。ソンセンニム・カムサハムニダ。

崔承喜についての資料や情報を提供して
いただきました方々ありがとうございました。